

中将姫説話覚書

目次

はじめに……………	3
1 当麻曼茶羅織成譚―中将姫説話の端緒……………	3
2 大納言と娘―呼称の成立……………	5
3 中将姫説話の成長―申し子譚と継子譚の付加……………	7
4 中将姫説話の構造―韋提希夫人との共通性……………	8
付記―資料紹介……………	10

日向一雅

— Abstract —

An Essay on the Tale of Lady Chūjō-hime

Kazumasa HINATA

The tale of Lady Chūjō-hime was completed in the late 12th century as the legend of the Taima Mandala which is preserved in Taima-dera in Nara Prefecture. The tale tells us how and why the Taima Mandala was made: Amitabha and Kannon visited Lady Chūjō-hime to grant her wish to see the Pure Land of Amitabha, and they wove the Mandala which represented a view of the Pure land. Later this developed into a ill-treated stepchild story. I analysed the tale and found that it has the same structure as the tale of Vaidehī (Idaike-bunin) in *Kuan-wu-liang-shou-fo-ching* (*Kammuryōju-kyō*).

中将姫説話覚書

日向一雅

はじめに

中将姫説話は鎌倉時代に当麻寺の当麻曼茶羅の縁起として成立するが、以後説話として、また絵解き、絵巻、奈良絵本として、さらに迎講という仏教民俗としてというようにさまざまな形で流布し、江戸時代には浄瑠璃や歌舞伎としても繰り返し上演された^(注)。そうした幅広い展開を見せるこの中将姫説話の全体を問題にする準備はできていないので、ここでは中将姫説話の形成とその構造について検討してみたい。

1 当麻曼茶羅織成譚―中将姫説話の端緒

中将姫と見做すことのできる人物の文献上の初見は『伊呂波字類抄』(院政期初期、十二世紀末成立)であるようだ。「当麻寺、名禪林寺、在大和国、横帯大納言女子建立」とあり、この「横帯大納言」の「横帯」は「横佩」と同意であろうから、その「女子」は後に中将姫とされる女子と同一人と考えてよい。

次いで建久三年(一一九二)成立の『建久御巡礼記』は、当麻寺の

建立が「橘豊日天皇之皇子、麻呂子親王御願」に成るとした上で、その「極楽変相」の縁起について二説あることを記す。

有縁起云、麻呂子親王并同夫人、善心擬一、信心無二、請吉土於此処、立精舎於其中、金堂者、弥勒三尊満月之光明旁彰、西堂者、極楽九品宝樹之変相織成、爰夫人常願云、我如何移浄土於斯砌、集衆生於斯庭、可為往生之縁者、然問、去天平宝字七年六月廿三日夜、有化人、以蓮糸織変相、化人于夫人、夜中暗願畢、不知移一仏土於斯土歟、又不知送九品基於斯庭歟、未曾有之心深不思議之念入骨云々、此縁起時代年号、尤不合歟、

彼寺僧申サク、織^リ仏^ノ事無^ニ慥^ニ日^ノ記、但^テ此^ノ曼茶羅下ノ縁、不^レ壊^レ之時^キ、天平宝字七年ト云フ年号、慥^ニ被^レ織^レ付^レタリキ、其^レ比^カヨコハギノ大納言ト云フ人有^リ、彼御娘朝夕極楽ヲ願^テ、曼茶羅ヲウツサハヤト願^テ起サレケリ、年来乍思過問^ニ、一ノ化人来^テ、一夜ノ間織^リテ、行方ヲ不知ト申、此大納言御娘一生ノ間、向^テ此ノ仏^ニ、タユマズ行ヒテ、極楽ニ生^レリト申シ伝タリ、此ノ仏ノ上ノ軸ニハ、フシナキ竹ノ一丈余ヲモチキル、

一説は、麻呂子親王とその夫人は「信心無二」であったから、精舎を建てて金堂には「弥勒三尊」を祀り、西堂には「極楽九品宝樹之変相」を織り成してあったというのだが、その変相の由来は、夫人の信心に

応えて「化人」が来て、夫人とともに蓮糸をもって夜中にひそかに織り上げたものだといふのである。それが天平宝字七年（七六三）六月廿三日夜のことであつたといふ。

しかし、これは麻呂子親王の時代とは合わないといふ疑問を呈する。麻呂子親王は橘豊日天皇（用明）の皇子で、聖徳太子（五七四～六二二）の弟なので当然の疑問である。

他の一説は、曼荼羅成立の年代が天平宝字七年であることは、その年号が破損以前の曼荼羅の下の縁に縫り付けられていたから間違いないとしながら、それが織られた由来はヨコハギノ大納言の娘の願いに応じて、一人の化人が来て、一夜のうちに織り上げたのだといふ。

両説ともに「化人」が曼荼羅を織つたとする点、その時期が天平宝字七年であつたといふのは共通している。ヨコハギノ大納言は『尊卑分脈』には右大臣藤原豊成を、「横佩大臣」と号したとあり、『公卿補任』には天平宝字九年（七六五）に六十二歳で薨じたとある。（在）これによれば曼荼羅織成の不思議があつたのは、豊成の最晩年のことであつたことになるが、曼荼羅成立の時代と人物との矛盾は一応解消されている。これ以後当麻曼荼羅の縁起はこの親子の物語として展開する。

そして『上宮太子拾遺記』（鎌倉時代末期成立）第三「当麻寺建立事」になると、次のように蓮糸曼荼羅の縁起としてほぼ完成した語りに発展する。

大坎天皇御宇。天平宝字七年癸卯。大納言横佩卿息女。年来朝夕營西方業。書写称讚浄土經二千卷。同年六月十五日。出家発願云。我不奉見生身弥陀如来者。不可出寺内。一食長済祈念徹骨。称名不退也。至第六日酉時。一尼来云。廻。汝勸求西方故。我来顕浄土変相。欲令見汝。可儲蓮莖百駄。云々仍申下宣旨。於近國

以忍海連為召使。三箇日間。九十駄蓮莖集之取糸。掘新井入此糸。其色自然五色染了。同廿三日酉一剋。又一女来云。糸既調哉。尼答曰。既調。女云。然嵩二把。油二升給之可織。云々自戌終至寅初三時之程。一丈五尺曼陀羅一鋪織調。以無節竹為軸。持来授尼。申暇教去。禪尼即問云。汝是誰人乎。女答云。我是如来左脇弟子也。

重説偈云。往昔迦葉說法所。今来法喜（中略）作仏事。卿懇西方故我来。一入是場永離苦。即放光明。指西入雲。于時禪尼悲喜相半。余氣如対。倩思惟事之因縁。随喜涙如雨下。泣拜曼荼羅。宛如臨浄刹。從爾以後。且暮対此曼荼羅。称名之行不忘。依之曆十余年。光仁天皇御宇。宝龜六年乙卯。三月十四日午剋。瑞雲簪二上之嶽。音楽奏禪林之梢。終遂往生之素懷畢。吾朝無双之勝事。当寺奇特珍事也。云々

ここでも大坎天皇（淳仁）の天平宝字七年六月廿三日のこととして、横佩卿の息女の願いに応じて曼陀羅一鋪が織られたとされるが、そのプロセスが具体的にになっているのが大きな特色である。まず横佩卿の息女が六月十五日出家を願って、「我生身の弥陀如来を見奉らずは、寺内を出づべからず」と不退転の祈りをしていたところ、六日目の酉の時に、「一の尼」が来て、「浄土変相を顕し、汝に見せしめんと欲す。蓮莖百駄を儲くべし」と告げるので、三日間に九十駄の蓮莖を集めて糸を取り、新しい井戸を掘って染めると五色に染まる。こうして糸が調えられた時に、「一の女」が来て三時の間に一丈五尺の曼陀羅を織り上げて去つた。この女は「弥陀如来の左脇の弟子」であつたといふ。つまり「女」は観音菩薩であつたのである。「尼」は誰かかといふに、阿弥陀如来であつたといふことであろう。『建久御巡礼記』では「化人」は一人と考えられるが、ここでは「化尼」と「化女」の二人になり、これが後の定形になる。

次いで「重ねて偈を説きて云く」というのが、この文脈では「女」（観音）なのか、「尼」（阿弥陀）なのかははっきりしないが、後に見るように阿弥陀と考えてよい。「一たび是の場に入れば永く苦を離れん」という偈を守って曼荼羅を拜すれば、あたかも淨利に臨むようであり、以後禪尼（横佩卿息女）は朝夕曼荼羅に対して称名の行を怠らず、十二年後の宝龜六年（七七五）三月十四日、瑞雲が二上山に登え、音楽が当麻寺に響く中を往生したという。この往生譚もまた後の定形となるものである。

ところで『建久御巡礼記』と『上宮太子拾遺記』との双方の記事を併せ持つものに、『諸寺縁起集』（護国寺本）がある。これは鎌倉中期以降の成立とされ^{（註）}、成立時期もちょうど鎌倉初期の『建久御巡礼記』と鎌倉末期の『上宮太子拾遺記』との間に位置するようである。

まず『諸寺縁起集』と『建久御巡礼記』との共通点を見てみると、『諸寺縁起集』では「極楽反曼陀羅織日記」において、「有縁起云」として「麻呂子親王并同夫人」の精舎建立と蓮糸の変相の話を挙げ、「又云、彼寺僧云」として「ヨコハキノ大納言」の娘と曼荼羅の話を記すが、これらは『建久御巡礼記』の「一説」と「他の一説」として整理した記事と文章までがほぼ一致する。違いは『諸寺縁起集』で「ヨコハキノ大納言」に「尹統」という人名が傍書されることくらいである。

『諸寺縁起集』と『上宮太子拾遺記』とを比べてみると、『諸寺縁起集』では「極楽変相曼荼羅事」として、「大坂天皇御宇」における「伏突大納言卿息女」の「我不奉拜生身弥陀者、不可出寺内」という祈りに感応して、「一人尼」が来て「極楽変相曼荼羅一鋪」を織り、「偈」を説いて去り、「本願姫君」はそれから十余年後に往生したとする。

ここでは語句に若干の違いがあるものの外は、『上宮太子拾遺記』の方が記事がやや詳しいというくらいで、両者の内容は同じである。比較的目立つ違いは姫君のもとに来た「尼」が『諸寺縁起集』では一人

であることと、大納言の名前が「伏突」となっていることだが、その脇には「横佩」と傍書される。

これら三書の成立時期がいわれるとおりだとすると、『諸寺縁起集』（護国寺本）は『建久御巡礼記』と『上宮太子拾遺記』との両方の記事を併せ持つ点で、中将姫説話の転換点に位置したといえようか。実際『諸寺縁起集』（護国寺本）の「極楽変相曼荼羅事」のところには、細字で行間に書き加えられた文があるが、それは『上宮太子拾遺記』からの加筆と考えられるので、これに先立って『諸寺縁起集』が成立していたと見做してよいと思う。

これに加えて『諸寺縁起集』（護国寺本）の特色をいえば、「横佩の御墓」の場所や、「古老相伝云」として、曼荼羅の軸に用いる節のない竹を「比登与竹」というが、それは一夜のうちに生えたからだとか、蓮糸を洗って五色に染めた井戸は「染野井」、「染井」といい、寺の北の野中にあるなど、伝承に事実性を与える書き方をしている点である。これらは『建久御巡礼記』や『上宮太子拾遺記』が曼荼羅織成の年月日を記載して、それを事実譚とした行き方をさらに強化、強調するものである。ちなみに「染井」については、その場所が天智天皇の時に毎夜光明を放つ所があるので、天皇が驚いてそこを調べさせると、仏の石像が現われたとか、その石で弥勒三尊を造ったとかという伝承のある場所だという。『和州当麻寺極楽曼陀羅縁起』（額安寺本）、『当麻寺流記』（宮内庁書陵部本）、光明寺本『当麻寺曼荼羅縁起』にも同様の記事がある。

2 大納言と娘—呼称の成立

右に見てきたところでは、まだ中将姫の呼称もなく、後には豊成と固定する父の呼称も「横佩大納言」「伏突大納言」、あるいは「尹統」という名前を傍書されるなど、一定していない。そういう中で、しか

し、彼らの人物像は徐々に成長したようだ。建長五年（一二五三）書写の奥書を有する仁和寺本『大和国当麻寺縁起』（奈良国立文化財研究所年報一九五九年）では、次のように記される。

大炊天皇御宇（中略）、有一臣下、世号横佩大納言尹統朝臣、賢知世之神才也、在鍾愛女、被養倚窓中、長于羅帳之下、其性清索不染紅塵、輕人間榮耀、志偏通弥陀願海、事林下幽閑、深□安養之煙霞、自書写称讚浄土教一千卷、

まず横佩大納言は名前は尹統となる（注）が、「賢知世之神才也」というのはここで新しく付加されたところであり、以後そのまま受け継がれる。その「鍾愛の女」が深窓に大事に育てられ、人柄は「清索」で世間の榮耀を軽んじたというのも、浄土信仰に生きる女の家庭環境や人物像を明確にするものである。これらは彼らの人物像の物語的な成長とあってよい。以下、この女（本願禪尼）の願いに応じて「西方極樂世界之教主」である「尼」と、その「左脇弟子観音」である「女人」が来て曼荼羅を織り上げ、「尼」は「偈」を説いて去り、女は宿願のとおりに紫雲と音楽と聖衆に迎えられて往生したと結ばれる。その記述は上記のどの諸本に比べても詳細なものになっていて、独自の本文の成長を窺わせる。これに對比してみると、『古今著聞集』（一二五四年成立）巻二はこの仁和寺本をやや簡略に書下したという体裁である。

それはさておき人物像の成長という点では、『私聚百因縁集』（一二五七年成立）巻七「当麻曼陀羅事」において大きく飛躍する。やや長いが引用する。

于時侍有侍臣。云横佩右大臣尹統。朝賢智世儲一人姫君給、父母鍾愛不斜。長帳下。形勝人。情超世爾ケレハ、奉始父母、家党大事トソ儀尊奉リ。朝夕柔和頂手ヲカサシ、夜昼瞻ニ花顔ニ奉ル。長給ナハ定踏ニ万女頂ニ給。若召ニ選当今仙洞後庭、皇后樹房立后

時家大幸ナリ。親面目トテ春花ニハ厭レ風、峯桜軒端梅秋草ニハ痛レ露。宮城野秋、嵯峨野女郎花、珍敬床上ニハ覆ニ懷抱袖一。仰崇衾下ニハ勸ニ乳養甘露一、竈長奉ル。宿植徳本形、副レ日艶々タリ。衆人愛敬体、追レ時濟々タリ。如此漸重三月日一、気介鶏奇。

遊離比程成給ケリ。其形勝世聞給シカハ、少シテ内侍被召ケリ。聖武天皇女孝謙天王時内侍ナリ。中将内侍ナリ。

ここでは横佩大納言が右大臣尹統となっている外は、「朝の賢知」であること、姫君「鍾愛」の並々でないことは変わらない。その姫君の名前の由来が孝謙天皇の内侍になったので、中将内侍と呼ばれるとされる点が注目される。が、なぜ「中将」なのかは分からない。ともあれ中将の名称が登場したことは画期的である。また見られるとおりに彼女の養育の様子がこれだけ詳述される例はこれまでになかった。右の仁和寺本の記述をさらに大幅に前進させたものといつてよい。「春花ニハ厭風」以下の対句的な美文も大きな特色であるし、内侍として宮仕えしたというのも、これが初見である。しかし、その宮仕えには心進まず、「偏に西方の往生を望み、深く弥陀の願海に帰し、朝夕称名を事として」、十三歳より称讚浄土教一千巻を書写するなど菩提心が深く、両親や乳母、侍女の諫めもついに力及ばず、天平宝字七年六月に出家して当麻寺に参籠した。以下曼荼羅織成の縁起となる。

ちなみに称讚浄土教一千巻の書写は『私聚百因縁集』の他に『上宮太子拾遺記』、護国寺本『諸寺縁起集』、仁和寺本『大和国当麻寺縁起』、『和州当麻寺極樂曼陀羅縁起』（額安寺本、一二六二年）、『当麻寺流記』（宮内庁書陵部本）などに見えるが、『建久御巡礼記』、『元亨釈書』（一二三二年）巻二十八には見られない。ついでにいえば『元亨釈書』は、横佩大納言を「僕射藤拱佩」といい、中将姫の結婚拒否をはっきりと「不納聘礼」と記し、出家後は一貫して「新尼」と呼称するなど、他書には見られない用語があつて独自である。

さて仁和寺本『大和国当麻寺縁起』『私聚百因縁集』において、横佩大納言と娘の人物像が詳しく語られるようになった様子を見たが、しかし、これらの諸書での展開はそれ以上には進まなかった。というより、以上のような展開が鎌倉期を通じての中将姫説話の流れであった。そこでは基本的に当麻曼荼羅縁起としての枠内にきちんと収まっていたといつてよい。説話的な展開は室町期に入って急変する。

3 中将姫説話の成長―申し子譚と継子譚の付加

西誉『当麻曼陀羅疏』（一四三六年）巻七は中将姫説話のひとつの完成形を示していると思われる。以下その筋書きを整理して見る。

本書は説教の場で講説されたものという体裁になっており、まず初日の話として次のように語られる。横佩大納言はこれまで官職や名前など流動的であったが、ここで「横佩右大臣豊成」となり、以後これに固定する。その豊成の人物像は「朝廷の賢人、当代の博覧なり。三綱五常の礼儀、鏡を懸け、四荒八極の政道、玉を磨く。鳳闕夙夜の勤め怠ること無く、司君金枝の榮へ忽ちに得て、万人の首を歩みたり」（以下、『疏』の引用は『浄土宗全書』本により漢文体を書き下し文に改める）というように、その賢人たるいわれが明らかにされる。

その豊成夫婦には子がなかったため、彼らは長谷寺に参籠して男女子を祈願したところ、たちどころに「類無き相貌」の姫君を得、その三年後には男子をも得たが、姫君七歳の時に母が亡くなる。母は遺言して、子供が二十になるまで「佗人に見せ給ふな」というが、まもなく豊成は左大臣諸房の息女と再婚する。はじめは継母も子供を慈しんだ。しかし、「女人の習ひ、詔曲の心多く、嫉妬の思ひ深きにや、無き人の子と思ふ故にや」、継母は子供たちを憎むようになり、京中の「武き不用の者」を呼び寄せて、二人の子供を葛城山の地獄谷に棄

てさせる。山中にさすらいこと八九日になった頃、「山神護法」の助けか、誰も何も言わないのに事件が宮中に聞こえて、帝が勅使を出して救出し二人を宮中に召す。これ以後姫君は僧について称讃浄土経を習い、一千巻を書写して母の菩提を祈ったので、帝も感嘆して姫君は十三歳の時中将内侍になり、弟は少将になった。将来は姫は後の位にもなり、弟は羽林槐門に昇るだろうと噂されたので、父大臣の喜びは一入ではなかった。

第二日の話は次のようである。姉弟の官位が進んだことを知って嫉妬と嗔恚に駆られた継母は、前回の失敗は生かして棄てたからだと考えて、今回は人跡絶えた深山で姫を殺害することを計画する。まず死生を顧みない兵に、姫が「大臣殿の御色」で「大臣殿の御煩ひ」になっていると許つて、仰山に綾羅錦繡の引出物を与えて味方にする。次いで姫君には母の墓参りと偽って紀州在田郡鶴山に誘拐する。二日目の暮れ方に鶴山の岩陰で兵は姫君を殺害しようとする。この時姫君が父と母と自分のために称讃浄土経を誦する姿を見て、兵は心を改めて姫君を助け、柴の庵を作つて菓や苳り穂を拾い薪を取り、熊野参りや吉野詣での者に物乞いをして、姫君の衣食を調達した。さらに妻をも都から呼び、夫婦で姫を養ったが、姫君十四歳の春に兵は急逝する。

その頃豊成は部下の侍の勧めで急に鶴山に狩りに出かけて、偶然姫と再会する。姫は都に帰ると入内し、帝の厚い寵愛を受けた。十五歳の時のことである。だが姫十六歳の時、弟が急死する。ここに「有為無常の理」を觀じた姫君は、夏には「后に立ち給ふべし」との世評を振りきつて当麻寺に行き閑居する。「無常の殺鬼は王位にも助けを置かず、炎魔の使者は皇后にも情けを置かず。今日十善万乗の位に登ると云ふとも、明日は無間阿鼻の底に沈む事は疑ひ無し。此度厭はずは何をか期と為すべからん」というのが、その決意である。そこで称讃

浄土經一千巻を書写し、十七歳の六月十五日に出家し法女と名乗った。

以下蓮糸曼茶羅織成のことは、右に見てきたところと変るところはない。中将法女の「生身の阿弥陀如来を見たいという願いに応じて、禪尼が来訪し、百駄の蓮が帝の勅命で集められ、禪尼が蓮茎から糸を紡いで染色し、化女が来て曼茶羅に織り頭し、無節の竹を軸にして懸け、禪尼は中将法女に曼茶羅が観無量寿經に依るものであること、自分は阿弥陀如来で、化女は観音であることを明かして去る。そして光仁天皇宝龜六年（七七五）三月十四日日本願禪尼（中将法女）は往生する。この曼茶羅織成譚の部分は仁和寺本『大和国当麻寺縁起』『私聚百因縁集』の本文に近い。

さて西誉『当麻曼陀羅疏』が上に見てきた諸書と大きく異なる点は、中将姫が長谷観音の中し子であり、継母によって二度までも山奥深くに棄てられ殺されようとしたという迫害に遇うものの、最後は救われるという部分にある。これは典型的な中し子譚であり、かつ継子譚の話型である。姫が帝の寵愛を受けるとか、出家して往生を遂げたというのも中し子や継子姫の苦難の後の繁栄、あるいは神として祀られるという話型にびたりと合致する。曼茶羅織成説話を切り離して、これだけで独立した物語になりえているといってもよい。これが室町期における中将姫説話の最大の特徴であった。曼茶羅織成説話を付随的なものにしかねない、主客転倒に向いそうな傾向を示していたといえよう。むろんここではそれが中将姫の浄土信仰や出家の動機になるものとして位置づけられていたのではあるが。

4 中将姫説話の構造—韋提希夫人との共通性

西誉『当麻曼陀羅疏』巻七が縁起でありながら、縁起の域を越えて

申し子譚、継子譚としての発展を示していた様子を見たが、そうした傾向は奈良絵本『中将姫』、お伽草子『中将姫本地』において一層物語的性格を強めたと見てよい。ここでいう物語的性格とは本来の縁起には関わりのない部分が肥大化する傾向を指す。たとえば西誉『疏』においても、長谷観音に子を祈るとか、中将姫の他に男子が生れたとか、中将姫が葛城山とひばり山とに二回棄てられたとか、継母の悪辣な計画の詳述など、要するに継子譚の話型に属する部分は縁起とは本来無関係であったといってしまうと思う。鎌倉時代の諸縁起にはそうした部分はなかった。たとえば古態を示すといわれる光明寺本『当麻曼茶羅縁起』は継子譚や申し子譚の話型を排除しているが、当麻寺本『当麻寺縁起』、慰斗家本『当麻寺縁起』は申し子譚であり、弟が生まれ、二回棄てられるというように西誉『疏』と共通する構造である。そうした申し子譚、特に継子譚の部分が室町時代を通じて中将姫説話のもう一つの核心として定着するのであり、その様子を以下に概略見てみる。

西誉『当麻曼陀羅疏』の中将姫の一生を整理してみる。次のような一代記の構成になる。

豊成夫婦長谷観音に祈り姫君誕生、天平十九年（七四七）。

姫君三歳 弟誕生。

七歳 母の死と遺言。継母を迎える。

九歳 姉弟一緒に葛城山の地獄谷に棄てられるが、十日ほどで救出される。

十三歳 姫君は中将内侍、弟は少将になる。中将姫継母の偽計によってひばり山に棄てられる。

十四歳 姫君の世話をしてきた武士が死ぬ。

十五歳 豊成ひばり山で姫と再会。中将姫入内。

十六歳 弟の少将死ぬ。中将姫に立后の話がでるが、当麻寺を訪

ねる。

十七歳 当麻寺で出家。蓮糸曼荼羅織成のこと。

二十九歳 聖衆来迎して往生する、宝亀六年（七七五）。

奈良絵本『中将姫』もまたほとんど同様の一代記の構成である。

大臣豊成は一人娘の中将姫を鍾愛。

三歳 母の死と遺言。

七歳 継母を迎える。

十三歳 継母の讒言によってひばり山に棄てられる。

十四歳 姫君の世話をしてきた武士が死ぬ。

十五歳春 父豊成がひばり山に狩りに来て姫と再会。豊成、継母と離婚。

十六歳 姫君入内、立後の評定があるが、出家を決意し、当麻寺を訪ねる。

二十一歳 当麻寺にて出家。蓮糸曼荼羅織成のこと。

三十四歳 聖衆来迎あつて往生する。

『室町時代物語集』四、『室町時代物語大成』九所収の中将姫説話は、この奈良絵本『中将姫』以下四本あるが、どれもほとんど同じ構成である。但し申し子譚は四本中一本のみであり、どの本でも中将姫は豊成の一人娘で、弟はいない。これと西誉『疏』とを比べると、物語的構成としては奈良絵本系の方が整然としているといえようか。西誉

『疏』の姫君の弟の設定は、中将姫が肉親との縁が薄いことを強調するためであろうが、なくて差し支えない設定である。また二回にわたって深山に棄てられるのも煩瑣である。そういう部分をも含んで中将姫が当麻寺を訪ねるまでの継子譚的部分は、どの本でも全体の六割ないし六割強の分量に及ぶ。中将姫説話における継子譚的構造の強弱が知られよう。そうした中将姫の継子としての苦難の大きさを、彼女の浄土欣求の動機であり根拠としたのである。継子譚をそのように

意味づけた点は中将姫説話の独自さであったといえよう。さらにいえば、中将姫の継子としての苦難を浄土欣求の動機とした物語の構造は、『観無量寿経』の韋提希夫人が息子の阿闍世王によって幽閉された話に比定できると思われる。中将姫の継子譚の部分には韋提希夫人の「禁母縁」の物語に見合っていると思われる。

次に曼荼羅織成譚の部分については、西誉『疏』巻八の次の記事がその物語の構造を説き明かしていると思う。

又願主は是女人なり。化尼化女来て之を織り顕す。能ふ所、共に女人の形を以て出現すること、此等の変相実によ由る所有るか。在世の韋提希夫人は能く請の機と為して、安樂世界に生ずる観門を請ふ。仏即ち請に赴きて此の十三定善を授く。終に夫人第七観の初めに五障の雲晴れて三身の月を拝す。

『観無量寿経』には釈尊が韋提希夫人の願いに応じて夫人の前に現われ、極楽世界を眼前に現して、極楽往生の方法を説いたという説話がある（注）が、ここで願主中将姫の前に化尼化女が現われ、極楽の曼荼羅を織り顕したのは、まさしくその釈尊に相当するのであり、中将姫はいうまでもなく韋提希夫人に比定される。『疏』の記事はそのように理解すべきことを明確に示している。中将姫説話における曼荼羅織成譚はこれを根拠とすることは間違いあるまい。

以上の検討を通して結論的にいうならば、当麻曼荼羅の織成譚の縁起はまず韋提希夫人の浄土を観るといふ「厭苦縁」「欣淨縁」の故事に則って成立したのであり、鎌倉時代の諸縁起はその当初の形をよく留めていたといえよう。ところが、そうした奇跡を招来した中将姫の浄土信仰の動機や根拠は何であったのかという点を説明する段階になつて、継子譚が導入され、それによって説明されたのである。しかし、それも実は韋提希夫人の幽閉という「憂惱」の体験に見合うものであった。物語の構造としてみれば、中将姫の継子譚の部分は韋提希

の幽閉の物語の読み換えであったといえるのである。それが室町時代における中将姫説話の新しい展開であった。そうした継子譚の独自の展開は中将姫説話が本来の縁起の枠を越える可能性を示すものであったといつてよい。以後中将姫説話が能や浄瑠璃や歌舞伎などに、さまざまな形で再生されたのは縁起の域から飛躍し脱皮したからであったといつてよいのであろう。

付記―資料紹介

「元禄十五年壬午歳五月良辰 書林古川三郎兵衛梓行」の奥書を有する『当麻曼陀羅縁起』上下(明治大学図書館蔵)の目次を掲出する。本書は上の西誉『疏』と奈良絵本・お伽草子系との両者の性格を併せ持つように見える。以下に見るように詳細な目次を冒頭に付して、全体の粗筋がよく迎れるようになってゐる。頁数は上巻二十七丁、下巻二十三丁、ともに各十二葉の挿し絵がある。目次は次のようである。

- 第一 曼陀羅おこる年代並中将姫の父母氏位のある事
- 第二 右大臣豊成世継の子なきゆへ長谷の観世音に祈りて其しるしある事
- 第三 姫三歳の春御母逝去の時遺言しなしたの事
- 第四 母上姫にむかひ色々遺言並勢義正子か由来の事
- 第五 御母終に死の道にいたり給ふ並北郎無常相の事
- 第六 姫七歳の時父大臣殿に後の母を迎へませと勧め給ふ事
- 第七 息女姫の勧めによりて御台所を迎へさせ給ふ事
- 第八 齡九歳の時より称讚浄土経を毎日六巻つつ読み母の回向を申ひ十三歳の秋の末中将の内侍に進み給ふ事
- 第九 継母は嫉妬さかななれば姫中将の官位に進み給ふをもそねみ大臣殿へあしさまに告げ知らせる事
- 第十 継母はよりより中将姫を追ひ失はん試みの事

- 第十一 中将姫を御輿に召させて紀伊国鶴山の奥にて害せんとする事
- 第十二 中将姫は最後の暇をかふて称讚浄土経を読み高声に念仏して臨終をまぢる給ふ事

当麻曼陀羅縁起目録巻下

- 第一 武士あつよはいとあはれに思ひ御命を害せず深山に庵をむすひ宮仕へ奉る事
- 第二 武士昔の友に逢ふて故郷の妻を呼び夫婦ともにはこくみ奉る事
- 第三 かの武士病死する、中将姫同しく妻嘆き悲しむ事
- 第四 翌年の春父大臣殿獵に出給ひ深山にて中将姫に逢ひ都に帰り給ふ事
- 第五 十六歳のころ後の位にそなはるへき宣旨あり然共中将姫は無常の殺鬼をおそれ唯閑居の思ひ深き事
- 第六 当麻寺にいたり庵をむすひ十七歳にて髪を落し法如と号する事
- 第七 法如比丘尼正身の弥陀を拝み奉らんと願ひまた化生比丘尼来て法如の願をかなへ給ふ事
- 第八 天皇叡感ましまして百駄の蓮茎をくたされ詔の詞の事
- 第九 糸懸の桜並染寺といふ事
- 第十 また化来の女人一丈五尺の大曼陀羅を織出す事
- 第十一 前の化来比丘尼曼陀羅を中将法如にわたし給ひ又四句の偈を示し給ふ事
- 第十二 化生の比丘尼並化来の女人は弥陀および観音なる事
- 第十三 また二上か獄にて弥陀如来四言四句の詞を示し給ふ事
- 第十四 中将法如往生の年月並聖衆来迎奇瑞の事

注

- (1) 中将姫説話に関しては談義や勸進唱導との関わりから宮崎円遵「中将姫説話の成立」(『宮崎円遵著作集七・仏教文化史の研究』思文閣出版、一九九〇年)、五来重「当麻寺縁起と中将姫説話」(『文学』一九七七年十二月)、徳田和夫「享禄本『当麻寺縁起』繪巻と『中将姫の本地』」(『お伽草子研究』三弥井書店、昭和六三年)、関山和夫「中将姫伝説と当麻曼茶羅」(『一冊の講座絵解き』有精堂、昭和六十年)など。中将姫説話の展開については、阿部泰郎「岩城隆利『説話と文芸』」(元興寺文化財研究所『日本浄土曼茶羅の研究』中央公論美術出版、昭和六二年)、島居フミ子「中将姫説話の近世演劇化」(東京女子大『日本文学』六七、昭和六二年三月)など。多方面にわたる諸資料の収集として当麻町史編集委員会『当麻町史』(当麻町教育委員会、昭和五一年)、元興寺文化財研究所『中将姫説話の調査研究報告書』(昭和五八年)がある。本稿に引用の『建久御巡礼記』『上宮太子拾遺記』『諸寺縁起集』(護国寺本)、『大和国当麻寺縁起』(仁和寺本)は、『当麻町史』によった。
- (2) 藤原豊成については『日本古代人名辞典』(吉川弘文館、昭和四八年)が、その経歴と生涯を手際よくまとめる。仏道に信心篤かったらしい様子が窺える。
- (3) 『国史大辞典』(吉川弘文館)の当該項目。他の書物の成立時期についても同書による場合が多い。
- (4) 豊成と尹統の名前については、西誉『当麻曼陀羅疏』巻八は、尹統は初めの名前で、豊成は後の名前ではないかという。初めというのは若い時分というくらいの意味で、後というのは壮年期以降くらいの意味であるようだ。
- (5) 『観無量寿経』「発起序」四節「厭苦縁」、五節「欣浄縁」に次のようにある。息子の阿闍世王に幽閉された韋提希夫人は、耆闍崛山の釈尊に向って祈る。すると釈尊は韋提希夫人の嘆きに同情して彼女の前に立ったので、韋提希は愚痴のかぎりを訴え、さらに「憂惱無き処」を教えてほしいという。釈尊は次のような世界を見せてやる。

爾の時世尊、眉間の光を放ちたまうに、其の光金色にして、遍く十方無量の世界を照らし、還りて仏の頂に住して化して金台と爲る。須弥山の如し。十方諸仏の淨妙の国土、皆中に於て現る。或は国土有り、七宝をもって合成せり。復国土有り、純ら蓮華なり。復国土有り、自在天宮の如し。復国土有り、玻瓈鏡の如し。十方の国土、皆中に於て現る。是の如き等の無量の諸仏の国土有り。敵頭にして觀つべし。韋提希をして見せしめたもう。

さらに韋提希が極楽に生れる方法を教えてほしいというと、次のように説く。

爾の時世尊、韋提希に告げたまわく、汝今知れりや不や。阿弥陀仏、此を去りたまうこと遠からず。汝当に繫念して諦かに彼の国の淨業を成りたまえる者を觀ずべし。我今汝の爲に、広く衆の譬を説かん。亦未來世の一切凡夫の淨業を修せんと欲わん者をして、西方極樂国土に生ずることを得しめん。彼の國に生れんと欲わん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三帰を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を誦誦し、行者を勧進す。此の如きの三事を、名づけて淨業と爲す。仏、韋提希に告げたまわく、汝今知れりや不や。此三種の業は、過去・未來・現在の三世の諸仏の淨業の正因なり。(柏原祐義『浄土三部経講義』改訂新版、平楽寺書店、昭和五五年。)

これを中将姫説話と比較してみると、中将姫が見た曼茶羅の世界と、彼女の生き方は、このような『観無量寿経』の記事に大変近いものであったといえよう。中将姫説話の淵源を韋提希の故事に求め得ると考えるゆえんである。

(ひなた・かずまさ)